

# 野村真理 『ウィーンのユダヤ人——一九世紀末からホロコースト前夜まで』

(御茶の水書房刊 1999年)

高橋 順一

ウィーンの旧市街の北側にドナウ川とドナウ運河に挟まれた地域がある。近くにウィーン北駅や大観覧車で有名なプラターがあるこの地域は、ウィーン市を区分けする二十三の街区のうちの二区にあたるが、一般には「レーオポルトシュタット」という名称のほうに馴染み深いと思われる。そしてこのレーオポルトシュタットという地名が口にされるとき、ウィーンを知る人間ならばたぶん誰でも、ヨーゼフ・ロートが『放浪のユダヤ人』というエッセイ集のなかで次のように描いているイメージを連想するであろう。「ウィーンへやってくる東方ユダヤ人は、二十の地区から成る市〔ロートの文章が書かれた当時のウィーン市は二十区から成っていた〕の第二区レーオポルトシュタットに住みつく。そこに住めば、プラターや北駅にも近いからである。プラターでは行商人も食って行ける——外国人に絵葉書売りつけたり、どんな場合にも陽気さにつきものの同情を買ったりして。彼らはみな北駅に降り立ったのだった。北駅のホールにはまだ故郷の香りが吹き抜け、帰途のための開かれた門となっている」(『放浪のユダヤ人』平田達治・吉田仙太郎訳法政大学出版局 一九八五年 四十四頁)。

レーオポルトシュタットは何よりもウィーンにおけるユダヤ人街としてイメージされる。ただこの言い方はじつは正確ではない。ロートの文章にもある通り、レーオポルトシュタットに住んだユダヤ人はウィーンのユダヤ人全体ではなく、主に東方ユダヤ人だったからである。「マツェン(種なしパン)の島」とも呼ばれたレーオポルトシュタットは、ウィーン北駅に東方地域、すなわちガリツィアやブコヴィナなどから着く列車を下りたばかりの名もなく貧しいユダヤ人たちが、ウィーンでの成功を夢見ながらとりあえずの仮寓を求める場所であった。そして東方地域からやってきてレーオポルトシュタットへ住みつく貧しいユダヤ人の存在は、今でもウィーンの街角でときおり見かける丈の高い黒帽子をかぶり少し埃臭い黒のカフタンを身に着けた彼らの姿——それは同時に、キリスト教的な西方世界＝文化への同化を拒みユダヤ教の信仰とイディッシュ語へと固執し続ける彼らの精神文化のあり様の象徴でもある——の異様な印象と結びつきながら、ウィーンにとって自分たちの富を簞奪しようとする異分子、蔑まれ排除されるべき外からの闖入者というイメージを醸成していったのだった。このような東方ユダヤ人のイメージが、一九世紀後半あたりからウィーンに瀰漫していった反ユダヤ主義の風潮の源泉となったことは明らかである。

\*

ところで「陽気な黙示録」とヘルマン・ブロッホが形容したウィーンの一九世紀末から二十世紀にかけての世紀転換期文化には多くのユダヤ知識人たちが深く関与していた。ブロッホ自身も含まれるその人脈圏の拡がりにはまさに瞠目に値する。文学におけるアルトゥーア・シュニツラー、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール、シュテファン・ツヴァイク、音楽におけるグスタフ・マーラー、アルノルト・シェーンベルク、哲学におけるルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン、精神分析におけるジークムント・フロイト、法学のハンス・ケルゼンなど名前を挙げていけば枚挙にいとまがない。そしてこのようなウィーン世紀転換期文化に関わるユダヤ知識人の人脈圏の基本的な背景をなしているのは、いち早く一八世紀にヨーゼフ二世の手で発布された寛容令以来、ハプスブルク皇帝権力の庇護を受けながら西方世界＝文化への同化と経済的基盤の確立に成功していったいわゆる「同化ユダヤ人」の存在であった。大富豪となったロートシルト家やグートマン家などに代表されるこの階層のユダヤ人たちは、もはやユダヤ教にもイディッシュ語にも固執しようとせず、ドイツ語文化・世界への同化のうちに自らの存在根拠を見出す——それは「ドイツ・オーストリア人」としてのナショナル・アイデンティティの形成過程と重なる——ようになっていったのであった。

ウィーンユダヤ人の問題について考えようとするとき厄介なのは、このような同化ユダヤ人の存在と先に挙げた東方ユダヤ人の存在のあいだに、経済・社会的な面でも精神・文化のあり方の面でもほとんど対蹠的といっていいほどの大きな隔りがあることである。しかもこの隔りには当時のウィーン・ユダヤ人のアイデンティティの根拠をめぐる複雑なイデオロギー的対立や政治的態度上の相剋が絡んでいるうえに、ユダヤ人を標的とする反ユダヤ主義に対する対応に関しても両者のあいだには甚だしい隔絶が存在しているのである。例えば「世紀末ウィーン」というようないいかたのもとでこの世紀転換期の時代状況を一括りにしながら論じるような傾向がまま見られるのだが、ウィーン・ユダヤ人社会に刻印された対立や隔絶を通して見えてくる錯綜した問題状況についての認識を抜きにしては本当の意味で世紀転換期のウィーン文化を捉えることは出来ないはずである。そしてウィーン・ユダヤ人の存在状況には、まさにウィーンが、あるいはより普遍的なかたちで一九世紀ヨーロッパ社会が体験した産業化や国民国家体制の形成の歴史過程のもとのアイデンティティ・ポリティクスのような様々なねじれがもっとも凝縮されたかたちで現れているともいえるだろう。

\*

野村真理の『ウィーンユダヤ人』は、こうしたウィーン・ユダヤ人の置かれていた状況とそこから見えてくる問題を、一九世紀末から第二次世界大戦の始まる直前までの時期、すなわちウィーンへの東方ユダヤ人の大量流入とそれが醸成した反ユダヤ主義の高まり、ウィーン・ユダヤ社会内部の同化派・正統派・シオニスト派の分裂と相剋、第一次世界大

戦をはさむユダヤ社会の危機的状況、そしてナチス・ドイツによるオーストリア併合（アンシュルス）とそれに続く破局へと至り着く一九世紀末から一九三〇年代にかけての時代の推移を対象としながら、現地における膨大かつ丹念な一次資料の蒐集と探査にもとづいて描き出した日本人の手になる最初の本格的な研究である。本書の構成をおおまかに示しておくと、まず第一部「世紀末ウィーンのユダヤ人社会」、第二部「第一次世界大戦とユダヤ人」、第三部「戦間期ウィーンのユダヤ人社会」というかたちで時間系列に従いながら全体が大きく三部に分けられ、さらにそれぞれのなかで問題系列にそくして第一部第一章「世紀末ウィーンのユダヤ人社会」、同第二章「反ユダヤ主義とオーストリア神話」、第二部第一章「ガリツィア・ユダヤ人難民」、同第二章「戦間期オーストリアの反ユダヤ主義」、第三部第一章「戦間期ウィーンのユダヤ人社会」、同第二章「放浪のユダヤ人」という章建てになっている。なお第三部には締めくくりとして「ホロコースト前夜」という独立章が付されるとともに、本書の扱う時代の前史を俯瞰する補論「一八四八年三月前期ウィーンのユダヤ人社会」が最後に置かれている。

野村の問題意識の特色は、「序」の部分における毎日新聞記者町田幸彦の「ハプスブルク・ブーム」への批判についての記述に現れている。八九年からはじまった東欧社会主義の崩壊の過程で、社会主義に代わるかたちでこの地域に秩序と安定を与える新たな地政的統合概念として「中<sup>ミッテル</sup>欧<sup>オイロパ</sup>」を再び古い塵を払って引っ張り出してくる議論があったが——日本での代表的論者として加藤雅彦を挙げることが出来る——、その際にその論拠のひとつとなったのがかつての「ハプスブルク帝国」における多民族共生の成功という神話であった。異なる民族や言語、信仰が混在する多民族的・多文化的国家＝共同体のモデルとしての「ハプスブルク帝国」という神話は、EUの理念の原型を作った一人がハプスブルク・オーストリア出身のクーデンホーフ・カレルギーであったことなどともあいまって、EU統合＝汎ヨーロッパ主義へと連なる理念的方向性の根拠としての「中欧」、その歴史的背景・土台としての「ハプスブルク帝国」における多民族共生の経験という議論に一定の説得力を与えたのであった。しかもこの「ハプスブルク」再評価の流れは、そのような理念的次元にとどまらず、一九九七年秋、ハプスブルク家嫡男とスペインの貴族ティッセン・ボルネミッサ家娘がブダペストで挙行した婚礼——この婚礼がかつてオーストリア＝ハンガリー二重<sup>ドッペルモナルヒー</sup>帝国の成立時に当時のハプスブルク皇帝フランツ・ヨーゼフのハンガリー王戴冠の場となったマーチャーシ教会で行われたこと自体極めて意味深長である——が巻き起こした異常ともいえるブーム的熱狂や一九九八年のフランツ・ヨーゼフ妃エリーザベットの没後百年におけるブーム——日本でも宝塚と帝劇で上演されたミュージカル「エリーザベト」はその数年前からウィーンのテアター・アン・デア・ウィーンでロングランを重ねていた——といった世俗的な次元においても顕著に現れている。町田はこうした「ハプスブルク・ブーム」に、「ハプスブルク帝国」における支配される側としての東欧の視点に立って疑義を呈したのである。もし「ハプスブルク帝国」の多民族共生が本当に成功していたのなら、なぜチェコやポーランド、ハンガリーが独立を目指す必要があったのか、と。

野村はこうした町田の疑問を諾った上で、そこに形成すべき祖国をもともと持たないユ

ダヤ人の視点を導入すると問題が違った角度から見えてくるという。すなわち「ハプスブルク帝国」が解体しドイツ・オーストリア自身も含めた東欧諸国が国民(民族)国家としての独立を達成したとき、それはユダヤ人にとって自分たちの居場所がそうした国民(民族)国家のどこにもないという事実、言い換えればユダヤ人にとって「ハプスブルク帝国」の解体によって完全に帰属すべき祖国というものが失われたという事実、と野村は指摘する。とはいえ、と野村は続ける。では翻って「ハプスブルク帝国」はユダヤ人にとって祖国たりえたのか? なぜ「ハプスブルク帝国」下においてユダヤ人のナショナル・アイデンティティを求めるユダヤ民族主義やシオニズムが生まれなければならなかったのか?野村は次のようにいう。「一九世紀末からホロコーストの前夜までウィーンのユダヤ人社会は『しかし』から『しかし』へと、『こだわり』から『こだわり』へと揺れ続けた。ユダヤ人は、多民族国家ハプスブルクを礼讃しつつも、そこでの民族共存が幻想にすぎなかったことを知り、みずからユダヤ民族主義へ走りつつも、民族自決の限界と危険性を認識する」(iii頁)。

この「揺れ」のなかでウィーンのユダヤ人はまさにそのアイデンティティの形成において、民族としての自己規定において、のしかかってくる反ユダヤ主義や排他的な民族主義の圧力にたいする政治的な態度決定において翻弄され、分裂と相剋にさらされることになる。野村は本書でその様相を克明に追ってゆくのである。

\*

この膨大な著作の全貌を細かく紹介することは限られた紙数のなかでは不可能なので、以下興味深かった論点や知見を中心にしながら野村の論旨を辿ってみることにする。

まず第一部第一章「世紀末ウィーンのユダヤ人社会」では、先に触れた同化ユダヤ人と東方ユダヤ人の対立の問題が描かれる。野村は、メンデル・ノイグレッツェルの議論に依りながら世紀末ウィーンのユダヤ人が基本的には三つのグループに分類されるという。第一のグループは、古くからウィーンに住み言語的にも精神的にもドイツ語世界に同化したユダヤ人である。このグループは経済的に上層階級に属している。第二のグループは、ハンガリー・ドイツ語地域——現在のオーストリア・ブルゲンラント州——やベーメン地方などからきたユダヤ人でその独自性をほとんど失いつつある。第三のグループはガリツィア、ブコヴィナなどから来たユダヤ人で、イデッシュ語に固執し続ける。とはいえ彼らもまたウィーンにおける成功を、すなわち第一のグループへの上昇を夢見る側面も持っている。

こうしたウィーンにおけるユダヤ人社会の分岐に影を落とすのが、「ガリツィア・ユダヤ人の貧困の特殊性」(十八頁)という問題である。農業地域であるガリツィアにおけるユダヤ人の存在は商人・職人としての役割に限定されていたのだが、そうしたユダヤ人にたいして一八世紀末から農民化奨励政策が取られる。しかしこの政策は失敗しユダヤ人の階層分化と没落ユダヤ人の貧民化を促した結果、都市部へのユダヤ人の流入が拡大することになる。こうしてウィーンのユダヤ人のなかでもガリツィア出身者の比率が際立って高くな

るのである。いうまでもなく先ほど挙げた三つのグループのうちの第三のグループの中心になるのがこうしたガリツィア・ユダヤ人に他ならない。

野村が本書における基本的な問題設定の縦糸として取り上げるのがこのガリツィア・ユダヤ人問題である。第一章の後半部ではこのガリツィア・ユダヤ人の存在が引き起こしたウィーン・ユダヤ人社会内部の波紋が描かれる。すなわち積極的に同化を推し進めようとするユダヤ人にとって、経済的に貧しいだけでなくイディッシュ語を話し——それは「ドイツ語」への同化を拒否するということを意味する——、自分たちの閉ざされたアイデンティティに固執するガリツィア・ユダヤ人の存在は煙たいだけでなく、自らの同化への志向を揺るがしかねない危険な存在となるのである。そうした意味でガリツィア・ユダヤ人はウィーン・ユダヤ人社会にとって、そしてある面からいえばガリツィア出身者自身にとっても、隠すべき「恥部」としての意味を担わされるのである——野村はそれを「ガリツィア・コンプレックス」と呼ぶ——。このガリツィア・ユダヤ人をめぐる相剋感情はその後の第一次世界大戦期におけるガリツィア難民をめぐる問題状況や「ハプスブルク帝国」解体後のガリツィア・ユダヤ人の国籍帰属問題などにおいても影を落とすことになる(第二部第一章および第二章参照)。

ただ一方極めてフロイト的な言い方になるが、ガリツィア・ユダヤ人にたいする相剋感情の背後には、憎悪・嫌悪に潜む「投影作用」に似た感情機制が存在するように思われる。すなわちガリツィア・ユダヤ人への相剋感情が本質的には自己の内部に潜むユダヤ性への嫌悪の他者投影としての性格を持つということである。このことはウィーン・ユダヤ人の同化と異質性のあいだで揺れるアイデンティティの構造に内在する問題を浮き彫りにしている。その点について野村は次のように指摘している。「ウィーンのユダヤ人の居住地や職業構成の偏りから推測される彼らの人間関係を見ると、彼らの文化的同化と現実の生活とのあいだには、ある「ずれ」があることに気づく」(四十一頁)。この「ずれ」を通して問われるのが「ウィーン・ユダヤ文化の『ユダヤ』とは何であるのか」(四十四頁)という問題であった。これにたいして野村は、ウィーン・ユダヤ人が集団として分かち持つ「あるもの」が確かに存在するにもかかわらず、それを現実の民族や宗教には還元出来ないもの、むしろそうした規定を拒否するものであるという。別な言い方をすれば、その「あるもの」がフロイト的な「投影」の機制のなかでガリツィア・ユダヤ人の持っている閉ざされた固有性への相剋感情へと対象化されることにより、逆投影的にいかなる地域・民族的な固有性も拒否するような「ハプスブルク帝国」の多民族的アイデンティティへの急進的な同化の意識を促すということである——野村によればその意識は、ユダヤ人こそがそうした多民族的アイデンティティの最良の担い手であり、それゆえにユダヤ人のうちに真のハプスブルク・オーストリア人のあり方が見出されるというところまでゆきつく——。こうしたハプスブルクへの同化の意識は、しかし客観的には決してユダヤ人を見るまなざしの冷酷さを緩和する条件にはならなかった。そこにもうひとつの「ずれ」の問題、すなわちユダヤ人の同化意識とユダヤ人を見る目とのあいだの宿命的ともいえる「ずれ」の問題が浮かび上がるのである。

\*

この「ずれ」から見えてくるのが、野村の本書における問題設定の横糸となるべき「反ユダヤ主義」の問題に他ならない。あるいは、反ユダヤ主義というファクターを通じてあたかも分光器にかけられた光線のように分岐するユダヤ人の側の主体の配置図の問題といってもよいだろう。

野村は、この問題についても基本的な視座をまず提起する。その際に取り上げられているのは、一八八二年に起きたハンガリーでの少女失踪事件にからむ「儀式殺人」論争であった。プラハ大学の神学者アウグスト・ローリングがユダヤ教における儀式殺人の实在を主張する議論を行ったのにたいし、ガリツィア出身のラビ、ザムエール・ブロッホが反論を行い、ローリングの議論の虚偽性を明らかにしたのであった。論争は明らかにブロッホの勝利に終わったのだが、問題はそれだけにとどまらなかった。

ウィーン・ユダヤ人にとってこのローリング・ブロッホ論争におけるブロッホの勝利は極めてアンビヴァレントなものであった。たしかにユダヤ教における儀式殺人の否定の証明は慶賀すべきことであったが、論争を通じてユダヤ人の存在やその問題状況がことさらな注目の対象とされることは迷惑千万な事態であったからである。野村は、こうしたローリング・ブロッホ論争への反応から透けてみえる、ウィーン・ユダヤ人のアイデンティティの深刻なねじれの構造に焦点をあてようとする。

ウィーン・ユダヤ人の主流（エスタブリッシュ層）である同化ユダヤ人にとって、ユダヤ人であること、より正確に言えば言語的・精神的・文化的な意味でユダヤ人の固有性を主張することは、忌むべきことに他ならなかった。むしろユダヤ人問題は消えてなくなることが望ましかったのである。そのことは彼らの政治的選択としての議会内の「ドイツ自由派」への肩入れに端的なかたちで現れている。ドイツ語世界とそれに支えられたハプスブルク・アイデンティティへの同化を通じたユダヤ性の解消こそが彼らの志向するところであった。この立場に立てば、反ユダヤ主義への対応も単純な反発・批判では済まなくなる。というのもゲオルク・シェーネラー、あるいはカール・ルエーガーなどに代表されるオーストリア反ユダヤ主義の潮流は、自由派との対立を内包しつつも総体としてみればドイツ・オーストリア勢力の枠組みのなかで形成されているからである。

しかし主流派のそうしたドイツ語世界への思い入れにもかかわらず、反ユダヤ主義の側にとってはユダヤ・エスタブリッシュメント層といえども嫌悪・打倒の対象たることをまぬかれなかった。とするならばそこに悲喜劇的ともいえるねじれ・ずれが生じることになる。つまり主観的にいくら同化を志向したとしても、つまりユダヤ性の解消を願望したとしても、客観的には依然として「ユダヤ人であること」の固有性は解消されないというディレンマである。それは言い換えれば、ドイツ・オーストリアへの同化を通じたユダヤ性の解消に自らのアイデンティティ（ナショナル・アイデンティティ）の根拠を求める志向が仮構性・虚偽性を帯びざるをえないということでもある。

ブロッホは反ユダヤ主義にたいする果敢な批判を行いつつ、返す刃をこうしたウィー

ン・ユダヤ人主流派の虚偽性にも向けたのであった。そして反ユダヤ主義と闘うフロントとしてブロッホが形成したのが「オーストリア・イスラエル同盟」であった。ここからウィーン・ユダヤ人の先に挙げた三つのグループの分岐と次元を異にする新たな分岐状況が生じることになる。その分岐は最終的には、同化への志向とユダヤ人をナショナルな固有性として政治的にも捉えようとする——ユダヤ人の国民(民族)国家の形成を志向する——シオニズムとのあいだの鋭い対立へと帰着するのである。

\*

まだまだ取り上げなければならない論点は多くあるが、ともかく極めて錯綜したウィーン・ユダヤ人の状況にたいして透徹したパースペクティヴを与えることに成功した野村の力業には満腔の敬意を表したい。あえて誤解を恐れずにいえば、本書は本格的な研究書でありながらも、楽しく読める「読み物」としても成功している。こういってもけっして本書を貶めることにはならないだろう。最後に、本書における野村の視座に立てば木に縁りて魚を求め類のことになるようにも思えるが、先に触れたウィーン世紀転換期文化の諸相にたいするユダヤ知識人の関わりの問題、より端的に言えば野村のパースペクティヴのなかに現れてきたウィーン・ユダヤ人のアイデンティティ・クライシスとウィーン世紀転換期文化の関わりの問題についてもう少し突っ込んだ議論が欲しかった気がする。この分野における古典的業績ともいえるカール・ショースキーの『世紀末ウィーン』(邦訳 岩波書店)やクラウディオ・マグリスの『オーストリア文学とハプスブルク神話』(邦訳 書肆風の薔薇)などを想起するにつけそう思われてならなかったのである。